

翻刻『紀の路御遊覧日記』

鶴崎裕雄
大利直美

*キーワード

文政七年／貝塚御坊願泉寺／和泉・紀伊国紀行／泉南・紀北名所歌枕／ト半家一門・家臣団

貝塚願泉寺 われわれ新川家文書研究会では国文学研究資料館の新川とト半家 家文獻調査と平行して大阪府貝塚市の浄土真宗願泉寺の文獻調査も行っている。この貝塚市の願泉寺は特異な存在の寺院である。

願泉寺の設立は、天正十五年（一五八七）五月十九日の記日を記す個人蔵『貝塚寺内基立書』に、行基菩薩の遺跡に十五世紀中期の応仁年中、蓮如上人が逗留し、人々が集まったことを寺院の始まりとする。この史料については種々史料批判が行われているが、およそ貝塚御坊（後の願泉寺）の設立は戦国期に間違いなく、続く織豊期から江戸幕府の成立期の混乱と深く関わりながら発展したと考えてよい。

戦国期、この泉州一帯は和泉守護の細川氏・河内守護の畠山氏・膝下荘園を泉南地域に持つ根来寺、加えて『政基公旅引付』の九条家のような荘園領主たちが三つ巴、四つ巴となって争っていた。その隙間を縫うよ

うに勢力を蓄え、拡張したのが、日根郡瓦屋を本貫とする佐野川新川家や中庄の新川家（はじめ三善氏、後の中庄新川家）などの土豪層であり、両氏は姻戚関係を結んで勢力を拡大していった。

信長政権下では御坊を中心とした貝塚の一向一揆が信長に抵抗して兵を大坂本願寺（石山本願寺）へ送った。天正八年顕如が、続いて教如が紀州に退出し、信長没後には秀吉の融和政策により顕如・教如たちは貝塚へ、続いて大坂天満に移り、最終的には京都の七条に本拠を与えられた。さらに徳川政権下では同じ七条の地に西本願寺と東本願寺が成立した。

このように貝塚の御坊は一時本願寺の中心寺院であったが、本願寺天満移座以降、寺内を預ったのが佐野川新川家出身のト半斎了珍（ト半家初代）であった。ところで、信長没後、秀吉と家康が小牧長久手で争った時、紀州や泉州の諸勢は家康に荷担した。小牧長久手合戦の翌年（天

正十三年)、秀吉は紀州攻めを敢行し、敗北した泉州の勢力は秀吉に従った。佐野川・中庄両新川家も秀吉の弟秀長の家臣小堀正次の指揮下に入った。

秀吉没後、卜半家・新川一門ともに徳川氏に接近した。特に、慶長十五年(一六一〇)貝塚の寺内で卜半家と住民との間の主導権の争いが起こった時、徳川幕府も大坂城方もともに卜半家に有利な判定を下した。この判定に対して卜半・新川一門は新年の挨拶を兼ねて駿府(静岡)にいる家康を訪ねた。その道中、新川盛政の詠歌を纏めたものが『駿河下向記』(翻刻 鶴崎裕雄「新川盛政駿河下向記」の史料的研究)『研究調査報告』³⁶ 国文学研究資料館、¹⁶³)である。

本稿の冒頭に「願泉寺は特異な存在の寺院」と述べた。特異な存在の一は、願泉寺は御坊として西本願寺・東本願寺両派に属していることである。二は、願泉寺の住職が得度するのは、江戸(東京)の東叡山寛永寺で行われることである。寛永寺は天台宗寺院である。三は、願泉寺住職の大名の如き存在である。こうしたことを通じて東西両本願寺から独立性を保ち、貝塚の領主としての地位を保持した。以上、近藤孝敏「貝塚寺内の成立過程について―「貝塚寺内基立書」の史料批判を通じて―」(『寺内町の研究』第三卷 法蔵館、⁹⁸)・大澤研一「泉州のなかの貝塚願泉寺」(『貝塚願泉寺と泉州堺』堺市博物館図録、⁰⁷)・『貝塚市史』第一卷、第三卷(貝塚市、⁸⁴ 復刻)に詳しい。

『紀の路御遊覧』ここに翻刻する和歌山県立文書館蔵『紀の路御遊覧日記』の概要 『日記』は、われわれ新川家文書研究会の研究対象である和泉国中庄の在地代官新川家に深く関連する貝塚の願泉寺住職が紀伊国の寺社参詣・名勝遊覧を行った紀行である。

『紀の路御遊覧日記』の体裁は、装訂袋綴、縦二四・八cm、横一七・〇cm、枚数二二丁、料紙は楮紙、表紙地は利休単で、唐花向かい鳥七宝繋ぎ模様、題簽は左に双辺で「紀の路道詣記」とある。ところが表紙の見返しに剥がされていて、剥がされた紙に「紀の路御遊覧日記」とある。これは内題ではなく、最初の仮綴じ本の原表紙で、現在の表紙を付けた時、表紙の見返しに貼り込んだ形跡があり、後にそれを剥がしたものとされる。本稿の題名については所蔵者の和歌山県立文書館『文書館だより』第43号(147)に従った。

願泉寺第十代住職卜半了眞は、文政七年(一八二四)九月、一族・家来を引き連れ、和泉国の犬鳴山から和泉と紀伊の国境を越え、粉川寺・紀三井寺・玉津島明神を参詣して、加太より和泉国に帰り、蟻通神社を経て帰宅した。この道中記には、冒頭に漢文と和文の序があつて、勅撰和歌集などの真名序・仮名序が何われ、文学意識が高いといえよう。

書き方はかなり雑駁で、和歌と俳諧を同時に書き込んだり、時刻の配列がでたらめであったりしているが、風景の詳細な記述とともに宿泊先の掛軸や扁額などを丹念に書き写している。特に興味深いのは主人了眞たちの朝食・夕食などを書き留めていることで、道中とはいえ、当時の食生活が窺われる。

以下、日次を追って行程を纏める。

- 9月23日 五ツ前 朝代法願寺小休、五ツ時 土丸極楽寺小休、五ツ半 大木村米屋源七 朝飯、九ツ時 不動尊参詣、八ツ前 瀧本坊御入中飯、八ツ半 馬部峠、六ツ過 志野峠小休、雨降る、六ツ半 桜池小休、五ツ半 粉川御着 宿車屋久蔵、夜食、朝食。
- 24日 五ツ半 粉川観音参詣、黒土村中飯、厄除観音御両所参詣、高田村田家軒小休、中居坂村張姫小休、七ツ半 岩出着、夜当地町筋御両所遊行、夕飯、朝飯。
- 25日 五ツ時 岩出御立、紀ノ川、三ツ家、馬つき、ゆり村、松林中丘山中飯。七ツ前 紀三井寺門前御着、即日観音参詣、七ツ半 時帰着、石碑書写。夜食、朝飯、紀三井寺眺望、和歌浦八景見物。
- 26日 四ツ時 紀三井寺門前旅館御立。乗船八艘。着岸。拝殿下休足、玉津島明神参詣、大宗寺蘇鉄山遊覧、浦家名産貝色々御覧、和歌浦、片男浪・天満宮・東照宮参詣。八ツ時 若の浦茶店中飯、七ツ時茶店御立。正暮六ツ時 和歌山御着。御宿。
- 27日 和歌山御立。五ツ半 過迄 鷺之森御坊参詣。四ツ半 北嶋渡し。四ツ時 狐嶋田家小休。九ツ過 並松通り、小家、松江浦遊覧。九ツ半 元之脇村糸切茶屋中飯。七ツ時 加田御着。御宿北川何某、張姫様御宿いな屋。(十年程前御前御小休。)夕御膳、朝御膳。
- 28日 五ツ時 御立。五ツ半 姥邊峠小休。四ツ時 大川八幡宮御両所参詣、慈雲山報恩講寺参詣。九ツ時 田川湊遊覧。九ツ過 中飯田川。箱作新田、七ツ時 貝掛村小休。黄昏 尾崎御着。御宿紀伊

国屋。夕御膳、朝御膳。

- 29日 五ツ半 時 尾崎御立。男里浄泉寺門前通過。四ツ半 躑躅岡林勝寺小休。九ツ前 中飯 信達邑。信達御立。八ツ時 蟻通明神御参詣。七ツ半 過頃磯通御立、四ツ池、佐の川、御帰館。

同行者 大名家と変わらないト半家の人的組織を見るためにも同行者の面々 を確認をすることは有意義なことであろう。

本記の著者は最初の仮綴じ本の原表紙に記された吞海軒と考えられるが、人物特定には至っていない。本記「仮名序」によれば、同行者の中で墨などの筆記具を携帯していたのは「目黒子」(才蔵)と「臣」||吞海軒のみであったとされるので、書務官・秘書官的な諸実務を行っていた上層家来の嫡流の子弟と予想される。「吞海軒」「吞海」の落款や署名を糸口に「願泉寺文書」を検索すると、嘉永七年(一八五四)九月五日〜一〇月一六日の「御朱印御改参向之記」(「願」A31)や慶応二年(一八六六)一〇月九日〜二月二七日の一四代將軍家茂急逝弔問の「江戸参府記」(「願」A31)を残しており、本記執筆から幕末に至るまで、ト半家来として実に四〇年以上現役で仕えていたことが判り、年齢未詳ながら「八十八翁」の時の書を残したように、長寿であったことも判明する(「願」L3・1)。以下、「願」A31)、「願」L3・1)などは貝塚寺内町歴史研究会作成の仮目録番号による。このほか、願泉寺所蔵の謡曲本(「願」G4)や能仕舞付(「願」G27・38・39・40)、笛曲目(「願」G3)などの伝書類に「吞海軒」「吞海」の朱印が押されているので、ト

半家の文化的伝統を引き継いで、能楽などの芸能にも長じた人物だったと考えられる。

この紀行の同行者の名前が最後の丁（22丁ウ）に列記されている。上段の主人筋の「御上」に○印が二か所あり、男性三名、女性五名を記す。下段には家来筋の「御供」に○印が二か所あり、男性一〇名、女性一四名を記す。次に「林兵衛」以下五名の名があり、最後に「駕籠人足七人」とある。

御上

御前 ト半了真。ト半家一〇代当主。安永七年（一七八八）生。幼名房丸。初名兵部（『並河記録』『貝塚市史』3 198～199頁）。正室新坊実盛女。側室和歌浦。正室と側室に五男五女。継職後、程なくト半家当主として同家の宗教的權威の再興や寺内法規の整理・再編を図る。文化五年（一八〇八）親鸞上人絵伝を筆写し、同文化一五年、初代ト半斎了珍から五代了匂までの歴代当主影像を修復した（「願」J3・M9・M20・K511）。本記、紀州参詣・遊覧の直前、文政七年（一八二四）九月、朝廷より薄色八藤指貫着用認可の免許状が下されている（「願」A114）。弘化三年（一八四六）三月一二日没、諡号顕明院。（「願」ト半氏系図）。

太郎丸様 ト半了諦。一〇代了真長男、後、ト半家一一代当主。文化六年（一八〇九）五月九日生。幼名太郎丸。室九代了恕女。五男六女。弘化三年（一八四六）六月に継職。慶応三年（一八六七）三月二三日権大僧正。明治十年（一八七七）十一月二日没（「願」ト半氏系図）。諡号興教院。紀州参詣・遊覧の直前、文政七年（一八四二）八月、江戸寛永

寺より僧綱連署達書・補任状等が下され、新得度として了諦の法名と蓮乘院号（「願」A153）。これより大徳を皮切りに次々と昇進、翌々年、文政九年一月までに権少僧都法眼和尚位に昇進（「願」A1486～A1491）。

参友丸様 了胤よしたね。文化十年（一八一三）四月二十一日生。一〇代了真三男。通称大蔵。ト半連技家「下屋敷」を相続。父了真影像に裏書を加え（「願」M7）、また彼自身の詠草も一点残されている（「願」A1693）。嫡子の了諦と夭逝したと推される末子按察使（按察使力）を除き、兄弟の了円（次男、幼名次若丸仏光寺公園養子）・済信（四男、幼名繁友丸、仏光寺円信養子）はともに養子に出たので（「願」ト半氏系図）、彼はト半家連枝として嫡流断絶等の不測の事態に備え、貝塚に留められていた。なお本記に次男了円・四男済信がみえないのは文政七年（一八二四）時点では既に養子に出ていたのであろう。

奥方様 了真の正室。系図によれば「新坊実盛女」とある（「願」ト半氏系図）。俗名は不詳。長女・次女を儲けたと思われる。なお、本記三年後の文政十年（一八二七）十一月五日に了真婚礼の記事があるので（曾我友良「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』一『寺内町研究』7」、系図に後室の記載はないが、彼女はそれ以前に没していたらしい。また、「御勘定所年中行事」天保十一年（一八四〇）四月二日に「新坊顕徳院」の祥月命日の仏事が執行されており（『貝塚市史』3 606頁）、夫、了真の諡号からみても、この人物が「奥方様」にあたると思われる。生家の新坊家については、未だ確証は得られていないが、大和国吉野山の吉野水分神社（子守明神）神官一族が新坊氏なので（表野家文書89355）、

恐らくここから嫁いできたのではあるまいか。

張姫様・常姫様・好姫様・俊姫様 卷末(22丁ウ)に奥方様に次いで四人の姫様の名が見える。「卜半氏系図」に記された了真息女五人のうち、三女・四女が好姫・俊姫とすれば、本記末尾の姫の記載順序は生年順だと推定され、張姫は「高田輪妻」とある長女、常姫は「小山之璋妻」とある次女にあたると思われる(「願」卜半氏系図)。この内、張姫・常姫の生母は正室(奥方様)であろう。好姫・俊姫の生母は側室(和歌浦)。

好姫(好子)は一〇代了真三女、文化十二年十月十日生。天保三年(一八三二)十一月、伊勢国名張藤堂(宮内)家(伊勢津枝藩、一万五千石)の九代長徳(一八一一〜一八六四)に正室として入嫁した(「願」卜半氏系図曾我友良「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』二『寺内町研究』8)。

俊姫は一〇代了真四女文政元年(一八一八)七月四日生。天保五年(一八三四)二月、柔和(柔)姫に改名。京都の公家梅小路家(藤原北家勸修寺・清閑寺庶流の堂上家(資格は名家))一〇代当主定徳(一八一二〜一八四七、兵部大輔)に入嫁した(「願」卜半氏系図。曾我友良「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』三『寺内町研究』9)。

また、系図で「稲葉勘解由妻」とされる五女に関しては詳細不明。或いはこの当時まだ出生していなかったか。

御供

市郎右衛門 津田篤、卜半家重臣の津田家三代当主。後の天保六年(一八三五)九月、家老役に就任(曾我友良「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』三」『寺内町研究』9)。

八郎 白井惟貞(本記の漢詩作者)。了真継職時の文化四年、卜半家来連署起請文に血判している(「並河記録」『貝塚市史』三卷 198〜199頁)。

貢 新川一門の又左衛門家(鶴原新川家・刑部大輔光長流の七代当主。諱は良頭(新川又左衛門家代々書上「願」A・728・A・729)。了真継職時の文化四年、卜半家来連署起請文に血判している(「並河記録」『貝塚市史』三卷 198〜199頁)。

兵衛 兵衛は丹羽氏。吉村家『諸用記』に丹羽兵衛がみえ、後に十一代了諦家督継職後の弘化四年(一八四七)十一月には家老役に就任している(曾我「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』四」『寺内町研究』10)。

数馬 北野家五代当主(「願」A・709)。諱は直道。吉村家『諸用記』に北野数馬がみえる(曾我「史料翻刻 吉村家文書『諸用記』四」『寺内町研究』10)。

左膳 高槻周行、卜半家譜代家来、高槻家八代当主。

才蔵 目黒将曾保慎目黒家六代目当主。

鉄五郎 熊田家五代当主。

判明しない志津摩・市之丞も卜半譜代家来であり、いずれかが漢詩作者「津田宏」であろう。

以上の男性の御供に続いて女性の御供の名が記される。老女とか奥女中といった上級の女中衆も含まれるが、ここでは特に和歌浦に注目しておきたい。

和歌浦 若浦とも記されたようで、実はこの女性は当主である卜半了真の側室であり、この旅に同行している長男太郎丸(後の一代当主了

諦」と三男参友丸、好姫、俊姫の生母である。このほか同行していないが他に男子二人、計六人の子供を儲けている。我々が国文学研究資料館の文献調査で確認した『天保四癸巳曆十二月六日諦聴院往生日記』（「願A-28」）によると奥老女であることがわかる。

ほかに供には**林兵衛**（松波）・**喜介**（佐野）・**傳七**・**源六仙蔵**が見える。

三行目以降の人名は、前の役付の家来上層に対して、「御奥老女」〔女中端下〕の女中衆の女名〔御勘定所年中行事〕『貝塚市史』三卷 602頁）、次に「駕籠人足」を除いた下層の家来（「刀指普代」と呼ばれた警護役の侍〔帯刀人〕の男名が列記されていると考えられる（「卜半従来仕来之覚」〔御勘定所年中行事〕『貝塚市史』三卷 564・607頁）。

ここで記された下層の家来の中では、源六が天保十一年（一八四〇）正月十五日、了真の堺奉行所年始御礼同で「御茶弁当源六」と、御供の中に確認できる（「御勘定所年中行事」『貝塚市史』三卷 602頁）。

本文中に見える 本文中に名が見える俳諧と漢詩の作者については**俳諧・漢詩の作者** 以下の通である。

※本文中の漢詩作者として名があがる者（同行者） ……計七名

「高槻周行」〔十丁ウ・十七丁ウ〕「白井惟貞」（八郎）〔十丁ウ・十七丁ウ〕「オ」十七丁ウ」「公」（卜半了真）〔十丁ウ・十七丁ウ〕「一東」〔十三丁才〕「可良」〔十三丁才〕「津田宏（邊羅房）」〔十三丁ウ〕「十四丁ウ・十六丁才」〔津田篤一（市郎右衛門）〕〔十七丁ウ〕

※本文中の俳諧発句・和歌作者として名があがる者（同行者） ……計一〇名

「柳眉」（吞海軒）「可良」「九壽呂」「芝蘭」「公」（卜半了真）「一色」「一東」「如金」「松琴」「友郷」

※書写の石碑・掛物・短冊等に見える作者・人名 ……計九名

「松塊（塊亭）」（松尾塊亭、紀三井寺漢詩・句碑）〔十一丁才〕「芭蕉翁」（松尾芭蕉、紀三井寺句碑）〔十一丁才〕「尾花庵澤左坊」（紀三井寺句碑・墓碑銘）〔十一丁才〕

「拜兵老人」（和歌山旅亭掛物漢詩）〔十四丁ウ〕

「當御国主」（徳川斉順、鷺森御坊阿弥陀前三字筆額）〔十五丁才〕

「秀風」（谷川旅亭屏風短冊発句）〔十九丁才〕「巴江」（谷川旅亭屏風短冊発句）〔十九丁才〕

「シンケ（新家）哥重」（躑躅岡林昌寺奉納雑俳発句）〔二十丁ウ〕

「ハタシロ（幡代）松風」（躑躅岡林昌寺奉納雑俳発句）〔二十丁ウ〕

宿所での 毎日記録されている「御上」（了真や了諦・奥方様・張姫た**食事の献立** ち）の朝夕の食事の献立を一覧に纏めてみた。旅行中ではあるが上流階級の食事の内容を知る貴重な資料である。

日	旅宿	夕食	朝食
23	粉川	皿 あゆ 汁 とうふ	平 のつへい 汁 とうふ
		平 あゆ・いも・大根・人参・牛房	猪口 こんひやく・白あへ 小皿 漬菜

<p>24</p> <p>岩出</p> <p>皿 甘鯛・近塩</p> <p>汁 すまし・あゆ・とうふ</p> <p>平 あゆ・人參・牛房</p> <p>猪口 鱈 大根・かつを・すりみ</p> <p>平 多ひ大根・人參・しやうが・いか</p> <p>汁 やくみ・かぶら・あゆ</p>	<p>25</p> <p>紀三井寺</p> <p>平 しい竹・あゆ・人參・山芋・里芋</p> <p>皿 かれ</p> <p>汁 とうふ</p> <p>猪口 いか・みそあへ</p> <p>御酒</p> <p>御吸物</p> <p>菓子椀 しい竹・焼とうふ・かんひやう</p> <p>汁 とうふ・菜</p> <p>皿 こんにやく・大根・しい竹・ゆ</p>	<p>26</p> <p>和歌山</p> <p>皿 まぐろ・煮付</p> <p>汁 細大根</p> <p>猪口 春きくしたし</p> <p>平 大竹わ・人しん・焼とふ</p> <p>汁 春きく</p> <p>猪口 こんにやく・白あへ</p>	<p>27</p> <p>加田</p> <p>皿 目張・煮付</p> <p>平 藻魚・人參・かため</p> <p>汁 とうふ・いくさ</p> <p>香之物 くき</p> <p>平 とうふ・葛生が</p> <p>汁 大根</p> <p>猪口 朝漬</p>	<p>28</p> <p>尾崎</p> <p>平 いも・しい竹・甘しや・あけとうふ・人しん</p> <p>汁 かぶら菜</p> <p>猪口 漬菜</p> <p>平 山の芋・やきふ・牛房・焼たこ・水菜</p> <p>猪口 梅ほし・さとう</p>
--	---	--	--	---

本稿は国文学研究資料館の大阪府貝塚市の願泉寺及び中庄新川家の文献調査に関わる調査研究報告の一環である。願泉寺と新川家は深い関係にあり、両者は江戸時代を通して大阪府南部の、泉南地域の文化の中心的存在であった。領主的存在であった願泉寺住職卜半一族の『紀の路御遊覧日記』を翻刻して近世文化の一端を窺うことができる。

和歌山県立文書館藤隆宏氏・大阪府貝塚市教育委員会曾我友良氏・上畑浩司氏のご協力を得、種々お教えを頂いた。感謝する次第である。

なお、主に全体の構成は鶴崎、人物比定・遊覧経路図の作成は近藤、所蔵者の和歌山県立文書館・大阪府貝塚市教育委員会との連絡は大利が担当したが、近藤は別稿「翻刻と解題中庄新川家蔵『伝受次第』」を執筆しているので本稿の執筆者名からは割愛した。

『紀の路御遊覧日記』 遊覧経路図

基図：「和歌山県全図〔輯製二十万分一図復刻版〕」

(平凡社『和歌山県の地名〔日本歴史地名大系31〕』特別附録、平凡社、1983年)



由良海峡



翻刻 和歌山県立文書館蔵

(表題)
「紀の路道詣記」

(原表題)
「紀の路御遊覽日記」

紀州紀行序

□ (秋郊文庫 朱文印) (秋郊野印 朱文印) (吞海軒 白文印)

吞海軒

原表紙 解題
(70・86頁 参照)

夫詩之為言也、發於咨嗟詠歎

之餘者、而所以先王之觀民風、

而施政於萬邦者、其道一大哉、

我 東方、近世所起、有誹僭者、

其道蓋似近焉、是亦因事物之

所感、形其情之所不忍者也、以

三十六句、為限矣、言月者三句、

言花者二句、置之於中間、節其

全篇者也、復或名歌仙、蓋所以

此集之成也、今茲文政七年九

月、^臣從 兩君、窮紀州之名勝、

其相從者、近臣十人、與・女流・世

僕、總四十九人、為一行焉、一日

之道程、或十里、或二十里、破格

之遠、纔不過於三四十里耳、蓋

┌ 1才

┌ 1ウ

以女伴之故也、所經山川、數出

名區、時是暮秋之末、攢峰聳而

紀水明、秋風颯木葉黃、廻玉駕

於絕壁、訪勝景於浮圖、陰晴有

時、變島巒之秋色、潮水涵空、極

此地之勝覽、或棹舟於若浦内

洋、或投釣於加田岩頭、彩霞兼

遠瀾明滅、白雲與南溟接連、高

浪打渚、響碎旅窓之際、孤雁破

夢、声断千山之外、仰顧鄉國、只

見雲烟、人生於此間、不能無感

也、風致與情從而生、悲喜共物

頻集、先者歌、後者和、^臣於此行、

從 嗣君、多暇晷、奉 命而、盡

書記之、為文房之遺玆焉、而此

篇之所裁、不強求句於山水、況

何爭工於世俗乎、只其所經、山

水形勝、句與情一而止矣、所悅

者、今夫昭代文德之時、生於仁

┌ 2ウ

┌ 3才

┌ 2才

①兩君 願泉寺卜半家の十代了真と十一代了諦。了真は文化五年(一八〇四)願泉寺住職。了諦は弘化三年(一八四六)住職就任。幼名太郎丸。
②從者 最終丁に総勢記載。

①若浦 和歌浦、和歌山市。聖武天皇の行幸以来の景勝地(村瀬憲夫・三木雅博・金田圭弘編『和歌の浦の誕生』清文堂、16)。
②加田 加太、和歌山市。紀伊国の最北西に位置し、現在も関西の釣り場として名高い。
③嗣君 太郎丸、後の願泉寺住職十一代了諦。

義之大道、敬從後塵、尋此名勝、

關關雉鳴、被彼聖化、與樂言者、

復何異焉、

九月廿三日の暁、犬鳴山御參詣の思召たらせられ、いと

ひそやかに御供せしに、東雲の比、地藏堂過るより

雨ふり出しぬれと兼て雨具の用意忘れぬ、おのゝ

かさよ、合羽よと乱れたりけるに、雨中の氣色いと

面白きなと口々獨り言して、程なく大木の茶店

に着ぬ、日も辰の刻過ぬるに、雨なを歇さりぬ、

たれいふとなく今宵ハ瀧本坊にて御一宿のよし、

あるハ粉川にて御一宿とも聞ふ、午の刻過る比、

臣^若君の御供して瀧本坊へ入りしに、これより

御供減して、すぐに粉川・和哥^音迄も御遊覧のよし、

御供の上下はしめて遠路のおもひをなしぬ、纒に

一日の御供と覚悟しぬれハ、衣類ハさらなり、墨他

もてる者たに只目黒子と臣とのミ、御國への書状・

門うへの文混雑いはんかたなし、筆もてるものに

遠遊の事なれハ、とまりくの日並書留よと命せ

「 3ウ

られし俛、罪を供奉いそかハしきにゆづりたく、

そのはしく^ミを記しす、

ひとつの錫こへしをさしてとびしに、南方の名山

草木眼中に歴したり、紀三井寺の入江には、

漢武横汾の遊ひに日をうつし、志野峠の雲雨

には、た々に巫山の神女の出現し給ふかと

あやしまる、扇をかざす夕日には満山の錦を

ひるかへし、笠の下に見る流水ハ白きぎぬを

ひくが如し、松江のうら千とりハ行かう人の

たもとに別れ、玉津嶋の神ハ秋の落葉に

感をます、旅の浴衣をかしならては、蒲團の

虱までもふりさがされ、茶屋の汁をすゝり

てハ、鍋の底の音するも聞つらし、御立を急ぐ

暁は、あやまつて他の足袋にふんご^{踏込}ミ、飯をもる

娘ハ、杵子もて客にあたるもまたおかし、

紀三井寺の眺望にハ、入相の鐘つくく^詩をた

くみ、布引の落^音には、故郷の雲そごろに恋し、

「 4ウ

①犬鳴山ハ大阪府泉佐野市大木葛城修験霊場、獵師が自分を助けようとした獵犬を殺したことを悔いた伝承地。犬鳴山七宝瀧寺がある。②地藏堂ハ貝塚市地藏堂。真言宗御室派寺院近木地藏堂（宝幢山正福寺）。③大木ハ泉佐野市大木、七宝瀧寺の所在地。④瀧本坊ハ七宝瀧寺本坊。⑤粉川ハ和歌山県紀の川市、観音霊場粉河寺所在地。⑥目黒子ハト半家重臣目黒氏の息子。⑦臣ハ筆者（呑海軒）。

「 4オ

「 5オ

①紀三井寺ハ和歌山市紀三井寺、紀三井山金剛宝寺。寺院は和歌川を挟んで東の名草山の腹にあり、和歌浦を一望できる。②漢武横汾ハ漢の武帝が汾水の船を浮かべ酒宴に興じた故実（『唐詩選』巻五）。③志野峠ハ大木越道で北志野村（紀の川市）へ越える峠。④巫山（ふさん）の神女ハ楚の懷王が夢で契つたという天象を掌る女神。⑤松江ハ和歌山市松江。紀伊水道に面し、松が群生する風光明媚な砂丘海岸。⑥玉津島の神ハ和歌浦鎮座の明神。和歌三神の一つ（『和歌の浦の誕生』前掲）。

岩出^①の亭主は料理の差配に聲をからし、加田^(加太)の

客饗應す、老婆ハ和布^②うる聲の一風あり、

いときり茶屋の莖ハ六百文にきもを消すも、御

茶・辨當もつ下部ハ三百文の遊女にころぶも有

ぞかし、昼めしをぬいてハ旅のつらきをさとり、

和哥の冷飯にハ人々の腹をこごやすうさをはらす、

女中は朝日さす加田の白砂に走り、群^{〳〵}に

小貝拾う粧ひハ籠の鳥を放すにさも似たり、

路を尋る童子ハ、菊を負て杖を急ぎ、淡嶋^④の

岩間に^ハ釣のさきに日の暮るゝをわする、寢覚

〳〵の暁は、蒲団のうちより句をうめき出し、

とまり〳〵の燈下には、雑談に眠を知らず、いく處の

雲水廻り〳〵て、はや御國近くになる俣に、越路

の足を沙持の調子にそろへ、磯通^(磯方)の酒を山姥

のうたひに覚しつゞけし色々も、廿九日の夜の

しら〳〵と明て、只忙然とひとり草堂にくたびれ

ふして、此紀行のミ枕本に残れり、いく日ならず

して、此まき〳〵をありの俣に清書せよと

命せられし俣、此あらましをはしめに冠らしめて、

5ウ

くりかへすことに、この山水に遊ぶ心地する、うそ
風流の賜ならずやと、同行のかた〳〵にしかいふ、

九月廿三日暁七ツ時御立

犬鳴山御参詣

五ツ前小雨

五ツ時

朝代宝願寺御小休^① 土丸極楽寺御小休^②

鳥の鳴朝の氣色や冬近し^③ 柳眉

秋雨や暫らく宿に極楽寺 同

五ツ半

大木村米屋源七御朝飯^④ 不動尊御参詣^⑤

寅大木是そ一切如々ふどう 可良 雨降りて旅の出て来る山路哉^{九壽呂}

もみち葉の漙う見えけり谷の底 柳眉

泉刃^(泉)處々御遊覽、直三瀧本坊江御入^{八ツ前}

甘ひやう^(干瀧) 金山寺味噌

御中飯 菓子椀 山のいも 小皿^(ゆ)

八ツ半 御立 曇不雨^{暮前} 馬部村御小休^⑥ 馬部峠

午の刻過る比、瀧本坊御立ありて、寝々たる

山路にさしかゝりけるに、跡をかへり見れハ、雲氣

7ウ

7オ

①岩出 岩出市。根来寺から紀ノ川を越える船戸の渡があり、紀ノ川に平行して加太街道が走る。交通の要衝。②和布 ワカメの異称。加太の名産。③糸切茶屋 加太街道の射箭(いやと)頭八幡社前の糸切餅を売る茶店(紀伊名所図会三卷下)。④淡嶋 淡島明神鎮座(和歌山市加太)。

①朝代宝願寺 大阪府熊取町朝代。正当山法願寺(曹洞宗)。②土丸極楽寺 泉佐野市土丸。福寿山極楽寺(真言宗御室派)。③柳眉 吞海軒。④大木村 泉佐野市大木。犬鳴山七宝瀧寺の所在地。⑤七宝瀧寺本尊。⑥馬部村・馬部峠 紀の川市打田。大木から和泉・紀伊国境の馬部峠(大鳴峠・大木越・馬辺峠とも)。

はしめて晴、四峯忽然として日光の開く

ありさまを見て、雨のおもひを安堵しぬ、

竹馬・合羽・籠のおくるゝをも知らず、馬部峠

にさしかゝりけるに、日もまた薄暮に近し、

かゝる處に雲色俄に冥々たり、燈火用意

せる荷もおくれけれハ、何とそ志野峠まで

いたり、かしこに待合さんとおもひけるに、一聲の

谷風渡るよとおもひしに、山雨沛然として

盆をかたむくるがごとし、もとより右手ハ屏風

を並るか如き山嶺高く、左手ハ数間の岩間、

水音と共に深く、跡へ戻らんとすれハ、多くの

上下小路に連りて行違う人も危し、先へ

走らんとすれハ、石徑暗くして一步／＼雨具に

遠るに似たり、雲山もあやめも分らぬうち、

下供のおそきを呼あり、獨り心得顔に雨具

とりにはしるあり、駕籠を呼あり、松明とりに

戻るあり、かさをかたげ走るあり、提燈をもち

走るあり、松明の消るあり、走る駕籠あり、

此間の雨に上下ともに、雨のはじきに通らぬ

はなし、漸松明・提燈のそろう比ハ、雨も

①竹馬＝天秤の両端の箆で荷を運ぶ道具。大名行列や行商に利用。②遠る＝「とほざかる」の訓か。

なりて、風なを颯々たり、

雲となり雨ハ志野路の紅葉哉 可良

瀧らす枕や麝香や秋の雨 芝蘭

六ツ過 六ツ半

志野峠御小休 桜池御小休

五ツ半

粉川御着、御宿車屋久蔵

行程貝塚六里

御夜食

一皿 あゆ あゆ 朝御膳

汁 とうふ 平大根 いも 一平 のつへい 汁 とうふ

人参 猪口 こんにやく 小皿 漬菜

白あへ

牛房

廿四日五ツ半

粉川御立、観音御参詣、黒土村御中飯 松屋何某

厄除観音御両所様斗御参詣

高田村田家軒御小休 中居坂村張姫様斗御小休

岸和田五色餅名物

①志野峠＝既出。②桜池＝既出、北志野村溜池、桜の名所。③粉川＝紀の川市粉河。『粉河寺縁起』で知られる観音信仰の霊場。④黒土村＝紀の川市。⑤厄除観音＝紀の川市。長田観音寺。⑥高田村＝打田の誤りか。⑦中居坂村＝紀の川市中井阪。⑧岸和田五色餅名物＝現在詳細不明。

七ツ半^①岩出御着 京屋丈助

夜ニ入当地町筋御両所様斗御遊行、

粉川方当地迄行程二里半 尤五十町巻里、

夕御膳

朝御膳

皿	甘鯛	すまし	平	炙ひ・大根	やくみ
	近塩	汁あゆ		人參・しやうが	汁葉付
		とうふ		いか	かぶら
平	あゆ		猪口鱈	大根	あゆ
	人參	粉之物		かつを	
	牛房			すりミ	

廿五日朝色晴朗

心地よや朝日を傳うかし烟(炊)蘭(芝蘭)

五ツ時

岩出御立 紀ノ川 三ツ家 入村家
与菊花

馬^④つぎ ゆり村^⑤ 松林丘山^⑥ 御中飯

七ツ前

紀三井寺門前御着、兵庫屋何某御宿、

即日、観音へ御参詣、七ツ半時、及薄暮御帰宿、

岩出より当地、此日凡三里半 尤五十町巻里

①岩出ニ既出。②紀ノ川ニ奈良県から和歌山県を流れて紀伊水道に入る。③三ツ家ニ和歌山市満屋。④馬つぎニ馬次、和歌山市大垣内。⑤ゆり村ニ塚村、和歌山市布施屋。⑥不明、松林の丘山か。

9ウ

見下せバ秋風多し紀三井寺 公

によつほりと霧のうへなる紀三井寺 可良

旅館曙光秋嶺分 周行(高樓)

朝なきやきりふらなむ紀三井寺 芝蘭

樓臺画出去来雲 同

松山の紅葉をふるう朝の鐘 公

供侍のさわぎ立たるあられ哉 芝蘭

松濤傳到梵音響 惟貞(白井)

見上れハ紅葉錦や紀三井寺 柳眉

只是丹楓朝日薫 公

紀三井寺観音磴道之半 石碑之写

横ニ 寛政九年丁巳陽喜節門人某等

裏ニ

自銘

六十有七半醉

半醒告老達

観花白松青

未代幻住生涯

風羅談笑微

中不讓詩歌

松尾槐亭誌

松尾槐亭

帆白し

時雨るゝや

時雨ぬ沖の

槐亭(松尾)

見上れハ

紀三井寺

さくら

芭蕉翁(松尾)

尾花庵

たゝ言ハ

鳴まし和哥の

浦千とり

於浪花写

寛政十二庚寅

十月十四日

萍左坊墓

於浪花写

11オ

①紀三井寺観音磴道ニ紀三井山金剛宝寺。西国三十三所観音霊場ニ番札所。名草山の中腹の本尊十一面観音立像の本堂までの登り道、傍らに歌碑・句碑が続く(87頁)。②槐亭ニ紀州藩士松尾槐亭(一七三二-一八一五)、俳諧・画家(俳画)を嗜む。松尾亭。③見上れハさくらしもうて紀三井寺ニ紀三井寺核塚の芭蕉の句、『菊苗集』出典(校本芭蕉全集)。真作なれば元禄元年『笈の小文』旅の句。④萍左坊の墓碑には「於浪花終焉」とある。

御夜食

しい竹

平 あゆ

皿 かれ

猪口 いか

人參

汁 とうふ

御酒・御吸物

里芋

御朝飯

こんにやく

皿

大根

菓子椀

しい竹

汁 とうふ

しい竹

焼きうふ

かんひやう

紀三井寺

眺望^①和歌浦八景

紀三井寺晚鐘 和歌浦秋月

宮之嶋布引

雑賀夕照 玉津嶋暮雪

沖之蔦塩濱

形見帰帆 名草晴嵐

妹背舟付

吹上夜雨 布引婦^②厂

八景

人もいつ我いつ月の磯枕 一色

見かへれハ古里遠し砂の厂芝蘭

見上れハ紅葉の中や紀三井寺 可良

ぬかつけバ身に入む風や玉津嶋 "

浴くくと霧の中なる片男浪 "

霧深しぬるゝ岩間や妹背山 "

11ウ

廿六日 晴風

四ツ時

紀三井寺門前御旅館御立、御乗船 八艘

舟中即興

さし汐に秋も暮行人江哉 公

さし汐や秋を湧出す紀三井寺

芝蘭

朝日よるとき出す寺の紅葉哉 蘭

きりの中より片男なミ風

可良

はつ厂的いもせのかたを詠いて

柳眉

渡る小舟を繋く石がき

一東

真丸う海の廣さよ冬の月

眉

△御着岸 拜殿下にて御休息、玉津嶋明神御参詣、

② 大宗寺 蘓鉄山御遊覧、浦家当地名産貝色々、

御覧、夫ハ和哥の浦、片男浪・天満宮・東照宮

御参詣

折くハ時雨て返る和歌の浦 眉

八ツ時

波白妙つたの錦や玉津神 蘭

若の浦茶店にて御中飯

うら枯や神の岩多し "

△ 紙子がぶりて世を余所になし

如金

入玉津嶋神主乞

ウ 眠籠を見れハ障子ニ紅紛の跡

良

墨紙与水、

首筋ぞつと狐なくなり

良

あき風や頼りにかわく 蘭

面影のそれかあらぬか恋ころも

蘭

筆のうミ

12才

①和歌浦八景 中国の瀟湘八景（山市晴嵐・漁村夕照・遠浦帰帆・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・洞庭秋月・平沙落雁・江天暮雪）に擬えた和歌浦の八つの名勝。②宮之嶋 玉津島の名勝。③沖之蔦 玉津島の名勝。④妹背 後、和歌浦十景として数えられる。鶴崎裕雄「中世文学の和歌浦」蘭田香融監修『和歌の浦』和泉書院、93。山本啓介『歌枕の聖地―和歌の浦と玉津島―』平凡社、18。

①玉津嶋明神 既出。②大宗寺 紀州東照宮別当寺天曜寺大相院。③和哥の浦 既出。④片男浪 和歌浦の砂嘴。山部赤人「若浦に潮満ち来れば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る」（万葉集卷六）による。⑤天満宮 玉津嶋神社の西の山腹に鎮座。⑥東照宮 天満宮に並び、藩主徳川家の祖家康を祀る。

□茶店御立七ツ時

茶店

すしづめに人おしおうも風味哉

12ウ

①五百羅・漢吹上通り

宿鳥凌風廻夕陽帶水昏 一東

處々御遊覽

獨遊千里客仲焉賦招魂 可良

右吹上晚眺

正暮六ツ時

和哥山へ御着、御宿

舛屋又兵衛

此日行程紀三井寺右海上十八丁

陸和哥山迄三十六丁、凡一里半

大竹わ 汁 春きく

一皿

まぐろ 汁 細大根 一平 人しん

つとぶ

猪口 こんにやく 白あへ

13オ

廿八日晚燈下

□そゝろ寒けし夢のうきはし

良 行くて和哥山に宿す曉

すれ合て行燈に落し下り蛛

眉 旅馴て紅葉の宿の朝寝哉

一東

跡白波に千とり鳴くなり

蘭 厂の音まじるすり鉢の音

可良

月の夜ハ凄う覚ゆる加田の浦

眉 秋風に夜明の駒のいさむらん

芝蘭

真帆一はいに唐を目懸けて

良 反古のうらにかき集めつゝ

如金

絶景に筆捨られし古法眼

良 川音の時雨に月のすみ渡り

良

腰辯當の軽うなりけり

蘭

少しハあけて冬籠りする

柳眉

咲花にうすわた入の比なれや

同

ッ翠簾越にしわぶく聲の細くくと

蘭

野の春風を跡先にして

眉

夜明鳥の鳴くそよふ

眉

和歌口号 津田宏

雨ミちハマとう荆の袖たもと

東

早ニ發ニ紀三井寺ヲ

菖蒲飛出る猫にびつくり

良

直ニ詣ニ妹ノ瀨ノ拜殿ニ

来て見れハ昔邊の茶屋も青風

金

浮レ舟入レ佳ノ境ニ

矢倉太鼓を和哥て寝て聞

眉

促レ駕窮レ名ノ勝ヲ

うら盆の月くずの葉にひつみけり

良

聞レ酒任レ石ノ出ルニ

塔婆のうへに見ゆるはつ霜

金

買レ鮮ヲ補レ服ノ空ヲ

生垣に南天の實のこほれてや

蘭

繞レ城出レ京ノ橋ニ

かくるも忽にし釣釘の鯉

東

尋レ宿投レ米ノ又ニ

酔卧て樽を轉ハす花の影

蘭

汁ノ熱頻ニ頰ノ鍋

奴の髭に蝶の居眠る

良

食ノ冷已切レ櫃ヲ

ニラ 大空ハ廣う聞ゆるいかの聲

眉

源六幾消レ魂ヲ

小共のせがむ小屋の夕暮

金

喜助大現レ怒

背戸と門せきにせかるゝ間夫とく

良

漸任ニ服ノ皮ノ張ニ

下駄と石駄てかけ落の人

良

自覺ニ自蓋ノ寛ヲ

崩れても其俣残る小町塚

東

叩レ手求レ蒲ノ團ヲ

回ろう近くあられとバしる

蘭

並卧似レ炙ルニ魚ヲ

うら町ハぶり賣聲の高かりし

眉

伏見人形をもて遊ぶなり

一色

①津田宏 松波大進宏、ト半家臣、嘉永六年法橋補任。

①五百羅漢 和歌山市秋葉山権現社山麓に建立された五百羅漢寺。②和歌山 和歌山市。和歌山藩五万石の城下町。一時、信長に追われた本願寺の本拠が鷲之森御坊にあった。

麗日和風春十分

○日氣動未燈火已滅
絶景に一里の路も日の暮て

良

山櫻開處未紛々

けふハ三里の道急くなり

眉

行臨一目千株地

大空に残りし物ハ朝の月

松琴

難辨是花還是雲

ほろくくくと菊の花ちる

公

芳山賞花拜兵老人

行秋に野のはね釣瓶つつほく

良

道教へ見て獨り言いふ

眉

右和哥山旅亭掛物写之、

松風に追れて行し獨り旅

琴

一間かしたる鶯の籠

亀

咲並ふ雲井桜の一ツ家

眉

霞ゆたかに續く日務

蘭 14ウ

廿七日和哥山御立、五ツ半過迄鶯之森御坊

御参詣、阿弥陀前当 御国主之御筆額

安置 功德聚之三字焉、

四ツ時
北嶋渡し 小雨

功 文字金

徳 地紺

ふち五色(緑)

雲中ニ葵の

御紋金

四ツ半
狐嶋田家御小休

轉ひてもぬれても秋の山路哉

稲のむしろに霧の下り居る

てり曇霧間に長柄さしかけて

可良 芝蘭

九ツ過

並松通り、^①小^②家・松^③江浦

御遊覽遠近嶋巒

佳景花多白沙宛

霜雪のことし

御腰辨當被召上

寒けれど松江の浦の千とり哉

追おろす波は千とりと成にけり

行秋をなかし目に鳴千とり哉

何ともなしに急く松はら公 15ウ

村酒のつい醒易き冬の月

松江の浦に千とり三ツ四ツ

あはら屋に人の有げに牛の聲

糸切茶屋によい酒を飲

御所女房齊藤別當御供して

障子の内に何か呶て

余所目程怪我へなかりし酔たんほ

草履くわへた犬ころの顔

ゑいさらと月に小舟をおし出し

茂の中に見ゆる古塚

此秋も一両日に暮果ん

樽を片手に走る小奴

奥の花口の花より咲勝て

木具のうへまでのほる若鮎

糸遊にふらついて行旅の人

礫に飛ハぬ鳴さかるとり

箒目を見れハ御寺ハ禪宗にて

火を焚く者の誰か する

蘭

公

一色

柳眉

可良

眉

良

色

蘭

眉

東

柳 15ウ

九ツ半

③モト フキ ④イキリ
元之脇村糸切茶屋

御中飯

加田途中作 津田宏

徒吹クニ烟草ヲ一松一江ノ濱

總テ喰ニ握ニ食ニ糸切ノ店

漬菜買フ所纒ニ三盃

蘭

東

眉

良

蘭

東

金

眉

東

金

眉

東

金

眉

東

眉

東

良

蘭

①鶯之森御坊 浄土真宗寺院。信長に追われた本願寺頭如・教如が在所、雑賀一揆の本拠地。
②御国主 和歌山一代藩主徳川斉順、將軍家齊の七男、文政七年(一八二四)六月和歌山藩主。
③狐嶋 和歌山市狐島。淡路街道が通る。

①小家 和歌山市古屋、松江の西。②松江 既出。③元之脇 和歌山市本脇。④糸切茶屋 既出。

無情見取六十一文

邊羅房草

青梅をかてバ飛込竹の窓

小袖すれ／＼あやめしほ／＼

夜の香に聞そこないし青奴

口説落した雨の浮足

くらがりに朝茶をすゝる山の家

路次一はいに南きんのつる眉

月陰に翌日の仕業の工夫して

遠う聞ゆる初厂のこゑ

里問へハけふも一日紀の路にて

神に詣りや家内安全

山伏を饗応て居る町はづれ

霞の中に見ゆる行烈

花ハ八重名ハ九重の春風に

残らす出る嫁菜たんほゝ

加田旅舎夜五ツ時一卷終成、

16ウ

御獲物

ちぬこ三枚

ふく 式ツ

あふらめ一ツ

目張 式ツ

宿加田浦 公

旅館夜深湖声幽

寒風燈暗客中愁

飄々不識秋将尽

暁色蕩々雲氣収

及薄暮御帰宿

今日行程凡三里

夜入御提重御残

頂戴

紀三井寺晚眺 公

山頭爾若暫登臨

滄海接天秋色深

紛々風葉此求奥

落暉幽景直千金

宿加田浦 高槻周行

旅舎兼漁倚岩邊潮声夜落北窓烟

寒風吹断千里客宛似秋雷動曉天

夕御膳

一皿 目張 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

汁 とうふ 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

汁 とうふ 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

廿八日 御立五ツ時

加田浦邊御遊覧

貝からを握れハぬくし

あきのかせ

奉和同前 白井惟貞

朝暉赫々照汀頻

南海風光復覺新

粟嶋浦邊祠廟上

仰望日本國中人

宿加田浦 津田篤

旅館夜寒欲晚秋

友人已醉卧高樓

枕邊波浪打岩急

海外西風動客愁

朝御膳

一皿 目張 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

一皿 煮付 平 藻魚 一平 とうふ 葛生が 汁 大根

①加田 加太、既出。②淡島明神 和歌山市加太に鎮座。③了頁のこと。

①白井惟貞 八郎 (69頁)。②津田篤 市郎右衛門 (69頁)。③高槻周行 左膳 (69頁)。

① 三山村

峠まで息吹秋の

芝蘭

五ツ半

清ミツ哉

姥邊峠御小休、眼下海色絶景略之

「 18才

四ツ時

松山やさき成人も

芝蘭

③ 大川八幡宮御両所様斗

秋の宮

御参詣

④ 慈雲山報恩講寺御参詣、通り筋より

合掌の中に紅葉の 可良

壺町東建石あり

はさまりし

九ツ時

可良

⑤ 田川湊御遊覧

浦へりや人きれくの霧幾重

芝蘭

かし烟秋の日柿の

しるへ哉」 18ウ

九ツ過

芝蘭

御中飯、田川 外屋利右衛門

馬駕籠やせハまる秋の

わらけむり

同所屏風短冊写之

水鳥や波なみしむ浮沈

秀風

大根

一しきり千鳥の声の動きけり 巴江 一汁 赤味噌 小皿 大根くき

風味かなり

① 箱作新田 土屋相模殿領分 代官所あり

村中南かりわに禪寺有

七ツ時

七ツ時

③ 貝掛村御小休

④ 尾崎御着、及黄昏御宿 紀伊國屋長七 御旅館筋むかひ

此日行程凡六里

張姫様御宿

目の前に赤う見えたる紅葉哉 九壽良 紀伊國屋庄七

通る人このもしうおもう蜜柑哉 同 御本宿之親類之由

はたごや二而ハ無之

夕御膳

いも

しい竹

汁 かふら菜

一平 甘ひやう

あけとうふ

うれしさよ翌日ハ故郷の帰り花

人しん

猪口 漬菜

朝御膳 山の芋

菅の笠ハ海山の雨風に

一平 やきふ

汁 とうふ

破れ、旅のころもハとまりくくの

牛房 な

さごねにあかづきぬ、翌日は

①三山村 和歌山市深山。②姥邊峠 現在の大川峠か。③大川八幡宮 和歌山市大川に鎮座。
④慈雲山報恩講寺 和歌山市大川。浄土宗寺院。⑤田川湊 和泉国日根郡谷川湊。大阪府岬町谷川。

①箱作新田 山中新田、大阪府阪南市箱作。②土屋相模殿 常陸国土浦藩主土屋相模守寛直（寛政七年、文化八年）、箱作・貝掛・尾崎は土浦藩領。③貝掛村 阪南市貝掛。④尾崎 阪南市尾崎町。

焼たこ

水菜 猪口梅ほうし

さとう

大木なる催しを紀伊の国

この年月のうさを忘れて

けふハはや元の栖かに帰りけり

家奴の顔こそ思ひやらるゝ

九月廿九日御国入のうれしさも、

旅寝もこよひ斗とおもへハ、

そゝろ心に名残おしくて

芝蘭

月今宵秋も旅寝も

名こり哉

御

五ツ半時

廿九日尾崎御立

男里浄泉寺門前ふ

つゝじが岡八十八ヶ所御廻り

四ツ半

躑躅岡リンシヤウ林勝寺御小休

奉納之額雜俳写之

一里日の暮たハ是とわらび哉

一むかし鏡の奥に翁あり

御中飯九ツ前 信達四 小川甚左衛門

廿九日東雲

沙魚寝する名残の旅や秋の暮

つたのもミチハ浦の山く 同

さひ鮎を国の土産と手に提て可良

ふとんたゝんでよい天気なり芝蘭

すミ渡る雲にはくるゝ冬の月公

小ふね漕出す早川の霜 一色

ウ事足らぬ霞ハ良けれ山景色 柳眉

歌重

松風

春あきやつゝしか岡の 可良

朝もミチ

同所屏風写之

あきの日の入江の昔の夕風に

うかへる月の影も寒けし

梅櫻柳ごし成酒の酔 一樹

山路ニて御供におくれけるに

摘捨し花をしをりそ秋の山 芝蘭

追付兼し流し江のめし 可良

足はやに秋の日あしも急くらん蘭

信達御立八ツ時 蟻通明神御参詣

御提重御歎

拜戴 末社 五社大明神 住吉大明神

多賀大明神 愛宕大権現

蟻通拜殿前白沙

即興

醉覚のあくび出るや秋の森 芝蘭

咄しときれて厂のひと声 可良

立よれハ菊にしふ茶の薫るらん 蘭

自慢たらゝ馬ハ聞役 良

霜の夜や月にも烏帽子たして出る 蘭

ちいさい口へ握りめしくう 良

一陰ハ真田も喰つ女將軍 良

夕部口せわしき殿方のふみ 蘭

宵月に駒の手綱をかいくりて 良

〇 紅葉をうつす盃のうち 柳眉

老人に見所多し一おとり 良

何を見るにも硯取り出す 蘭

三味線の音も気高し川東 良

曾嫁をさがす冬枯の客 良

あハら家に燈火寒し霜柱 一色

岸の小草のよこむいて出る 松琴

咲花に静さ暮るゝ奥の院 家郷

けふをきのうとおもう 良

長き日 蘭

①男里浄泉寺 願泉寺末寺、泉南市男里。②躑躅岡八十八ヶ所 泉南市の林昌寺にある四国八十八ヶ所の分霊場。③躑躅岡林勝寺 林昌寺、真言宗寺院。④信達 泉南市信達、交通の要衝地。

①蟻通明神 泉佐野市長滝の蟻通神社。山村規子「能「蟻通」と穴通し」鶴崎・小高編「歌神と古今伝受」和泉書院、18

七ツ半過る比、儀通^{儀通}御たちありて四ツ池の

あたり八日もすでに入りて、風景さだかならず、

佐の川にてはやまちまうけたる御迎ひ

の人のうれし顔なるに、御挑燈を入れさせて、

たゞ御帰館のよろこひのミをいふ、

村名・寺号木字を聞に暇あらず

定而當字多かるへし、見る人ゆるし給へ

御上

○ 御前

御供

太郎丸様

○ 市郎右衛門・八郎・貞・兵衛・志津摩・

参友丸様

数馬・左膳・市之丞・才藏・鉄五郎・○和哥浦・

○ 奥方様

春・節・玉枝・金・弥・勝・小膳・竹・幸・

張姫様

かね・まさ・かや・さつき・柳・林兵衛・喜介・

常姫様

傳七・源六・仙藏、駕籠人足七人

好姫様

俊姫様

紙数廿壹枚

22ㇺ

22ㇺ

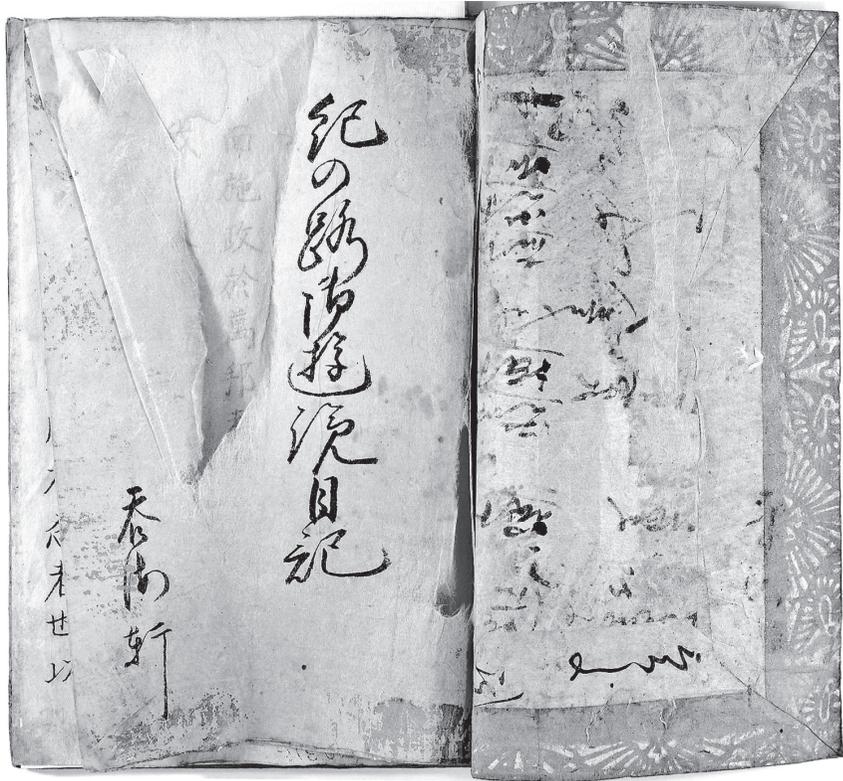
①四ツ池＝泉佐野市中町・葵町にあった池。太平洋戦争中、陸軍飛行場として埋め立てられた。

〔表紙〕

※表紙は後補（利休風地向かい烏七宝繋ぎ唐草）。題簽「紀の路道詣記」は、左肩に貼題簽（双边・書き題簽）。



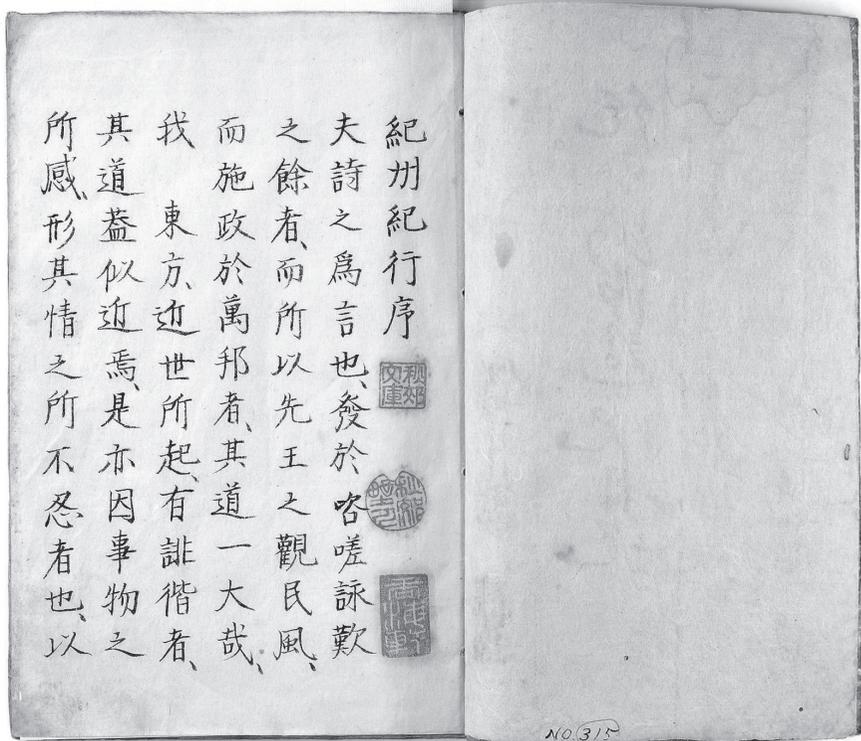
〔表紙裏地〕



〔原表紙〕

※原表紙は後補の現表紙に糊付けされていたが、現状では剥がされている。原題「紀の路の御遊覧日記」は、打付書（無辺で中央に、また左下部に「吞海軒」と著者名が記されている）

〔見返し〕



〔二丁表〕

真名序 ※序題下の「秋郊文庫」(正方形単郭朱文印 1.6 × 1.6 cm)・「秋郊野院」(四形単郭朱文印 2.0 × 2.0 cm)は、旧蔵者の蔵書印。「吞海軒」(長方形白文印 1.6 × 2.8 cm)は筆者落款。国文学研究資料館蔵書印「データベース」によれば、「秋郊文庫」(ID 14338)・「秋郊野院」(ID 14339)印は二例つつ確認でき、一つは花柳静史編『野地の若鹿』(明治十六年刊)の巻首、もう一つは泉山人著『仇此「世物語」』上巻(文政七年序)の巻頭に押されたもので、共に松永文庫個人蔵である。

紀州紀行序
夫詩之爲言也、發於咨嗟詠歎之餘者、而所以先王之觀民風、而施政於萬邦者、其道一大哉、我東、亦近世所起、有誹諧者、其道蓋似近焉、是亦因事物之所感、形其情之所不忍者也、以

